

氏名	三輪 地塩 <small>みわ ちしお</small>
学位の種類	博士（文学）
報告番号	甲第488号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	殉教の記憶・記録・伝承 ―津和野キリシタン史記述再考―
審査委員	(主査) 久保田 浩(立教大学大学院キリスト教学研究科 教授) 弘末 雅士(立教大学大学院文学研究科教授) 東馬場 郁生(天理大学大学院宗教文化研究科教授) 西村 明(東京大学大学院人文社会系研究科准教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

第一部 研究の前提

第1章 主題設定

- I キリシタン「殉教史」研究における問題の所在
- II 歴史的背景—津和野という空間（歴史的・地理的、宗教的背景）
- III 先行研究

第2章 「殉教」の概念史—日本語史における「殉教」概念とその周辺

- I はじめに
- II 『諸厄利亜語林大成』（1814年）
- III 『英和对訳袖珍辞書』（1862年）
- IV 福澤諭吉『學問ノスゝメ』七編（明治7年・1874年）
- V 『和英語林集成』（初版1867年・第二版1872年・第三版1886年）
- VI 『言海』（1889年-91年）
- VII おわりに

第3章 概念設定

- I 近代歴史学の経緯（ランケ史学からミクロストリアまで）
- II 「記憶」「記録」「伝承」の語とそれらの営為について
- III 言語論的転回を巡って

第4章 キリシタン殉教のプロトタイプの形成

- I キリシタン殉教物語の文学類型と殉教の規定について
- II A・ヴィリオンを紹介する日本キリシタン殉教史
—『日本聖人鮮血遺書』と映画『殉教血史 日本二十六聖人』—

第二部 記述分析

第1章 津和野の記憶と記録

- I 第二部の構成
- II 津和野キリシタン史の記録者たちとその記録
- III 津和野キリシタン史記述の「一次史料」とされるもの

第2章 津和野の記録と伝承—伝承を意図した記録

- I 津和野キリシタン史が記された「記録」の時代区分と世代
- II A・ヴィリオンにおける「殉教（者）」の「記憶」と「発掘」

第3章 津和野の伝承と記憶—創られた記憶

- I 津和野キリシタンにおける「逸話」
- II 高木仙右衛門と守山甚三郎に行なわれた「氷責め」の「記憶」
- III 安太郎に現れた「聖母」の「記憶」
- IV 守山裕次郎の十字架と遺言の「記憶」

第4章 結語

参考文献

(2) 論文の内容要旨

1860年代に生じた所謂「浦上四番崩れ」により、約3400人のキリシタンが捕縛され、名古屋以西の西日本各藩に流配された。その流配先の一つが津和野藩で、ここに送られた信徒たちの多くは指導者的存在であり、特に厳しい説諭・拷問を受け、流配者153名のうち、36名の「殉教者」を出したと伝えられている。本論文は、こうした津和野キリシタン史叙述における「殉教」の語りを、記憶論・エクリチュール論・物語論・歴史叙述論における諸理論から構築された、「記憶」「記録」「伝承」という三つの営為の循環構造という分析枠組で考察するものである。

第一部第1章は、従来のキリシタン「殉教史」叙述の聖人伝的性格を指摘し、ある特定の個別的出来事が「殉教」と概念化され普遍化されていく過程を解明する必要性があると指摘すると同時に、津和野藩に流配されたキリシタン「殉教」を素材とするマイクロストリアの実践を本論文の目的として設定する。まず先行研究自体が政治史的・文化史的・学問的文脈の中で検討され、その問題点が指摘される。

第2章では「殉教」の概念史的分析がなされる。日本語の対応語が存在しなかった *martelaar/martyr* が、「殉教者」と翻訳されていく過程を、19世紀初頭以降の辞書等の分析に基づき解明している。

第3章では、近代歴史学の成立から言語論的転回を経たマイクロストリアまでの歴史研究の流れを批判的に辿った上で、「殉教」の語りの生成史を記述するための理論的枠組として、エクリチュールやパロールを媒介とした「記憶」「記録」「伝承」の循環構造についての理論的考察がなされる。

第4章では、キリシタン殉教物語の文学類型に関する予備的考察がなされると共に、大正期以降の定型的な「殉教」の語りの展開に、宣教師A・ヴィリオン¹の著作とその映画化が寄与していたことが解明される。

第二部第1章は、「記憶」と「記録」の関連を論じ、「津和野キリシタン史」叙述の「史料」とされてきたテキスト成立の経緯を明らかにしている。

第2章は、「記録」された「記憶」の再叙述（「伝承」）の過程を時系列的に整理し、特に先述のヴィリオンが果たした役割に注意が向けられる。

第3章は、「伝承」と、「記憶」の「創造」との関係を、具体的な「殉教」物語（拷問としての「氷責め」、「聖母出現」、「十字架刑」）の編集史的・伝承史的分析を通して検討し、「伝承」を「記憶」を産み出す「創造的叙述」と捉える視点から分析している。

第4章は結論として、語られること（パロール）による「殉教」の誕生プロセス、「記憶」が「記録」され「伝承」されることにより再度「記憶」が創造的に構築されるという循環構造、個別的・個人的出来事の集合的「記憶」化、の三点について総括的に論じている。そして、本論文の分析結果に基づく今後の研究課題について指摘されている。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は「浦上四番崩れ」の実態を記述するのではなく、歴史叙述に見られるキリシタン「殉教」言説を系譜学的分析に基づき緻密に跡づけた上で、発話・記述による意味付与という不断の営為を通して「記憶」が創造的に産み出されてきた過程を解明することを目的とし、従来のキリシタン史叙述自体の再検討を促すことを意図している。

記憶形成論や歴史叙述論から多くの理論的示唆を得ている申請者は、定型的「記憶」が語り続けられてきたのみならず、創造的に更新され続けてきたことをも指摘し、記憶〈内容〉(mémoire)の定型化・ステレオタイプ化・集合化の背後に潜む、記憶〈行為〉＝想起(se souvenir)の創造的機能に注意を促している。故に本論文は、歴史叙述のメタ理論的観点から遂行された、ひとつの歴史(「キリシタン史」の歴史)叙述であるのみならず、学術的／非学術的叙述といった画定そのものによって隠蔽されてしまいがちな、あらゆる種類の歴史叙述の創造的機能を、カルロ・ギンズブルグを範とするミクロストリアの視座から解明するという実践的叙述でもある。

研究の前提として行われている「殉教」概念史研究は、「殉教」概念の単なる単語史的情報の提供であるにとどまらず、概念の成立を広範な社会領域での現実認識モデルの模索として検討している。「殉教」の成立自体が近代的なキリシタン史叙述の揺籃期と重なっていることに着目した本論文は、概念史研究と「キリシタン殉教」言説史研究とを有機的に関連付けることに成功しており、それが論文全体を貫いているモチーフともなっている。

また「記憶」「記録」「伝承」の循環構造に基づく分析、並びに史料論的考察では、多様な研究領域で提出されてきた理論的考察を、「殉教」言説の誕生プロセスの解明という本研究の主題に引き付けて構成し直し、独自の分析枠組が提示されている。しかも、既存の諸理論が権威化されているわけではなく、個別テキスト・事象のそれぞれの性格と特徴に基づいた独自の理論的反省の結果として分析枠組が構築されており、ミクロな分析と理論的反省との有機的な連関が窺われる論文となっている。

(2) 論文の評価

本論文には、具体的な物語分析の分析方法が統一的ではない箇所や、ミクロな分析に理論的考察が十分には追い付いていない箇所も見られ、政治史・社会史・宗教史的文脈との関連からの「殉教」言説の成立・変容過程の分析が希薄である等の課題が残されているものの、「殉教」という価値を帯びた概念を巡る言説を、一元的な手続きによるのではなく、方法論的な多元性を自覚しつつ分析を行っている点で、歴史叙述に関する理論的反省が決して十分ではなかった従来のキリシタン史研究にとっては勿論、文化的想像力を扱う関連諸分野にとっても、より立体的な言説分析の可能性を示唆するものとして評価できよう。同時に、従来のキリシタン(殉教)史をミクロな物語分析から精緻に叙述し直す点においても、今後のキリシタン史叙述の新たな可能性を提示している論文であると判断できる。